慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 諸天体と諸天使の種別化 : トマス・アクィナスと種の理論 |
| Sub Title | Specification of celestial bodies and angels : Thomas Aquinas and his theory of species |
| Author | 石田, 隆太(Ishida, Ryūta) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 2019 |
| Jtitle | 哲學 (Philosophy). No.145 (2020. 3) ,p.35- 69 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | This paper analyzes Thomas Aquinas's theory of species by focusing on celestial bodies (e.g. the sun and the moon) and angels. Both share a common characteristic that each individual is specified due to its own specific nature, i.e., each individual is also a species by itself. According to Summa theologiae I.13.9, this individualism is expressed in terms of specific commonness or non-commonness. Whereas the specific nature of angels is incommunicable not only in reality, but also in ratio, that of celestial bodies is not common in reality, but it is common in ratio; it can be multiplied into many individuals under the same specific nature. Our analysis intends to provide us with a detailed explanation of the theory of species in celestial bodies and angels. We will indicate five common points that can be regarded as the principal reasons for their individualism: perfection of the universe, incorruptibility, self-sufficiency of operations, specification of operations and their effects, and specification of motions. On the other hand, the difference between the two kinds of beings involves materiality and immateriality, the former of which gives a logical possibility of quantitative division into many individuals under the same species. |
| Notes | 投稿論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000145-0035 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 諸天体と諸天使の種別化：トマス・アクィナスと種の理論

石　田　隆　太*

## Specification of Celestial Bodies and Angels: Thomas Aquinas and his Theory of Species

***Ryuta Ishida***

This paper analyzes Thomas Aquinas's theory of species by focusing on celestial bodies (e.g. the sun and the moon) and angels. Both share a common characteristic that each individual is specified due to its own specific nature, i.e., each individual is also a species by itself. According to *Summa theologiae* I.13.9, this individualism is expressed in terms of specific commonness or non-commonness. Whereas the specific nature of angels is incommunicable not only in reality, but also in *ratio*, that of celestial bodies is not common in reality, but it is common in *ratio*; it can be multiplied into many individuals under the same specific nature. Our analysis intends to provide us with a detailed explanation of the theory of species in celestial bodies and angels. We will indicate five common points that can be regarded as the principal reasons for their individualism: perfection of the universe, incorruptibility, self-sufficiency of operations, specification of operations and their effects, and specification of motions. On the other hand, the difference between the two kinds of beings involves materiality and immateriality, the former of which gives a logical possibility of quantitative division into many individuals under the same species.

* 日本学術振興会特別研究員 PD ／慶應義塾大学文学部訪問研究員

## 一　序

本稿の目的は，天体と天使という二つの特殊な種類の存在者に注目して，西洋中世のスコラ学者トマス・アクィナスがどのような仕方で種（species）の区別を理論的に捉えているのかを理解することである．天体と天使に注目する理由は，これら二つの存在者に対してトマスが，通常の質料的事物とは異なる種のあり方を見出しているということに存する．ここからは直ちに，天体や天使において語られる種と，通常の質料的事物に関して語られる種はそもそも統一的に理解できるものであるのかを問題にすることができる．言い換えるなら，種が存在すると言われるものすべてに関して，トマスは，種の統一的な理論と呼べるようなものを持っていたのかどうかという問題である．この大きな問題について考えるための有用な試金石として，天体と天使の種に関するトマスの考えを重点的に考察する．

先行研究はこれまで，天使の種に関するトマスの考えには比較的注目してきたが[1]，天体の種については主題化してこなかった．そのことは，トマスが天体の種に関して二様の語り方をすることと関連があるように思われる．彼は天体に関して，天使において見出されるのと同様な種別化[2]の構造をしばしば認める一方で，可能性のうえでは同一種における多数化を認めることがある．前者の観点は，諸天体の区別に関する科学史的研究[3]，トマスの天体論に関する研究[4]，およびトマスの天使論に関する研究[5]においてわずかながら注目されてきた．それに対して，後者の観点はほとんど注目されていないように思われる．これは，天体の種そのものに関してトマスの考えを分析することが主題化されてこなかったことを意味するであろう．それゆえ，天体の種について可能な限り包括的に論じることで，先行研究の不足を補うという成果が期待される．さらには，天体の種と天使の種を同時に論じることによって，天体論と天使論の連続性と非連続性についても考えることができる．したがって，類と種差によって種が構成

されるという単なる論理学的な手法とは少し異なる観点から種を考察していくことになる．

## 二　通常の質料的事物における種と，天使における種の個体説

まずは，天体と天使に共通して見られる種別化の構造を理解するために，天使と通常の質料的事物との間における種の違いについて素描しておくことにしよう．トマスは，既に初期著作『有と本質について』（*De ente et essentia*）においてこのことを論じている．最初に出発点となるのは，或る事物が固有の種の内に存在する根拠はその事物の本質に求められるということである．

> 事物がそれによって固有の類あるいは種において構成されるところのものは，事物が何であるか［すなわち事物の本質］を示す定義によって表示されるものである[6]．

人間の本質は人間性であるという具体例を用いるなら，人間性という本質を根拠にしてソクラテスやプラトンは人間という種に属している．すなわち，種は文字通りに本質主義的に理解されている．このことが，論理学的には種は類と種差からなると定式化される[7]．

そのうえでトマスは，質料と形相の複合からなる通常の質料的事物について，一つの種における諸個体の多数化を認める．その場合に多数化が認められるのは，一つの種の下で諸個体が異なる個的な質料を持つことができる限りでのことである．

> 諸々の複合的事物の諸本質は，それらが指定質料（materia designata）において受容されるということに基づく限り，指定質料の分割に即して多数化される．それゆえ，或るものどもが種において

は同じで数においては相異するということが起こる[8].

質料と形相からなる諸々の複合実体において本質が見出されるのであり，その諸実体においては［…］それらの本性あるいは何性が指定質料（materia signata）[9]に受容されている．そしてそれゆえ［…］，その諸実体においてはまた，指定質料の分割のゆえに，一つの種における諸個体の多数化が可能である[10].

動植物が基本的にこのような事物に該当するのに対して[11]，自らの存在（esse）自体は神から受容する必要があるものの，質料なしに形相だけで自存できる事物の場合――つまりはトマスが理解する限りでの天使の場合――，同一の種における諸個体の多数化は見出されない．イブン・シーナーの言葉を借りてトマスが言うように，天使の場合には個体の数と同数の種が存在することになる．

単純なものの本質は質料において受容されていないので，そこにはそうした多数化［すなわち一つの種における諸個体の多数化］はありえない．そしてそれゆえ，その諸実体［すなわち諸天使］においては同じ種に属する複数の個体が見出されないのでなければならないのであって，アヴィセンナが明白に言うように，そこに諸個体があるだけそこには［個体と同数の］種がある[12].

そしてそれゆえ，そうした諸実体［すなわち諸天使］においては一つの種における諸個体の多数化は見出されない[13].

この考えを便宜的に「天使における種の個体説」と呼ぶことにしよう[14]．なお，天使と同じく非質料的でありながら，すべての被造物を超えている

神に関しては類や種の適用をトマスはそもそも認めていない[15]．したがって，天使と通常の質料的事物とにおいては，それぞれに固有な仕方で種のあり方が存在していることになる．

## 三　事物に即した共通性と理拠に即した共通性：トマス的な種の理論の基礎

次に，天体の種をも考慮に入れて，種の理論の基盤となる部分について述べていくことにしよう．われわれは，通常の質料的事物，天体，天使それぞれの種に関する体系的な論述を『神学大全』（*Summa theologiae*）第1部第13問題第9項において見出すことができる．ここでトマスは，「神」（Deus）という名の特殊性について説明する中で，諸々の名によって表示される本性（natura）を三通りに区別している．この区別は，われわれの関心で言うなら，通常の質料的事物，天体，天使それぞれの種的本性の区別と対応する．トマスは，本性に関する三通りの区別を示すにあたって，事物に即した（secundum rem）共通性と理拠に即した（secundum rationem）共通性の二つを区別する．そして彼は，人間という質料的事物と太陽という天体を例にとって次のように言う．

> 人間の本性は，事物と理拠に即して多数のものに共通である一方，太陽の本性は，事物に即しては多数のものに共通ではなくて，理拠に即してのみ多数のものに共通である．というのも，太陽の本性は，複数の担い手において存するものとして知解されうるからである[16]．

トマスは，人間の本性であれ太陽の本性であれ，種的本性である限りは理拠に即して共通性が見られることを次のように説明する．

> 知性は，何であれ種の本性を，単一のものからの抽象によって知解す

> る．それゆえ，単一の担い手ないし複数の担い手における存在は，種の本性についての知解の外にある．それゆえ，種の本性についての知解が損なわれることなしに，種の本性は複数のものにおいて存するものとして知解されうる[17]．

知性は，個々のものからの抽象によって種的本性を知解する．それゆえ，或る種的本性が一つの個体において存在するか複数の個体において存在するかどうかということは，その種的本性の知解内容には含まれていない．したがって一般的に，或る種的本性の知解内容を保持することと，その種的本性が複数の個体において存在する可能性が知解されることは両立する．

他方で，事物に即しては，人間の本性が複数の人間に共通である一方で，太陽の本性がそのように複数の太陽に共通でないことが，ここでは特に説明されることなく自明とされている．言い換えるなら，太陽の唯一性という事実が，種的本性が一つの個体にしか見出されないこととして理解されている．そこでトマスは，個体について次のように言う．

> 単一のものは，単一であるというまさにそのことに基づいて，他のあらゆるものから分割されている．それゆえ，或る単一なものを表示するために付与されるあらゆる名は，事物においても理拠においても共通化不可能である．というのも，この個体の複数性が，把捉の内にも入りえないからである[18]．

トマスによれば，「アキレス」という名はまさにアキレスという個体にしか言われない．そのことが理拠においても共通化不可能であるのは，アキレスという個体が複数存在することはアキレスという名の理解にはそもそも含まれえないからである．太陽の場合，その種的本性が複数の個体にお

いて存在する可能性は認められていた（「太陽の本性は，複数の担い手において存するものとして知解されうる」）．すなわち，太陽の本性は理拠において共通性を保持し，これは人間の種的本性との共通点でもある．それに対して，アキレスという名が事物において共通化不可能であるのと同様に，太陽の本性は事物に即しては複数の個体に共通的ではなく，この点は人間の種的本性との相異点でもある．この相異点こそ，天体の種について考えることを困難にさせている要因である．種的本性が共通的か，それとも非共通的かという二者択一の下では，天体の種的本性は事物においては非共通的だと表現せざるをえない．しかし結論から言えば，次節で見るように，天体の種的本性が事物に即して非共通的であることの説明は，それぞれの天体が実際に自らの種に一つの個体しか持たないことを証明する諸天体の種別化論証においてのみ見出されうる．目下のテクストでもトマスは，太陽という名が，本性の名ではなくてあくまで個体の名として用いられる可能性にも言及している．

> もし，本性の側からではなくて，「この或るもの」として考察される限りでの担い手の側から神を表示するために付与される或る名があったとするなら，その名はあらゆるあり方においても共通化不可能であっただろう．［略］そしてそれは，誰かが［太陽という］この個体を指定する名を太陽（Sol）に付与した場合と類似している[19]．

トマスにとってこのことは，第一に，太陽という天体が，普遍としては人間だが個体としてはソクラテスだというような仕方ではなくて，同時に種的に共通的でありかつ個的には非共通的であることを端的に示している．第二に，より重要なこととしては，それでもトマスは太陽の本性を種的な次元でも捉えようとしていることである．これら二つの点は，天使についても同様である．

目下のテクストでトマスは，人間や太陽とはさらに異なる本性のあり方について説明する．それは，質料なしに自存できるような自存形相（forma subsistens）が持つ本性のことであり，トマスの体系では天使や神のような非質料的事物にそうした本性が帰せられる[20]．トマスによれば，こうした自存形相は事物においても理拠においても共通化不可能なものである．すなわちその種的形相は，ただ一つのものとして実際に存在しているのみならず，論理的にも複数化する可能性さえ持たない．

> 他方で，何らの担い手によっても個体化されず，自分自身によって個体化される諸形相――すなわちそれらは自存形相であるから――は，もしそれらが自分自身においてあるということに即して知解されたとするなら，事物においても理拠においても共通化されえないであろう[21]．

天使の本性に関しては，より固有な仕方で説明された箇所として『定期討論集　霊的被造物について』（*Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*）[22] 第５項を参照することができる．『霊的被造物について』は，トマスの著作としては後年の『分離実体について』（*De substantiis separatis*）と並んで天使論に関する集中的な論述を行っている著作である．この第５項は，天使が身体（ないし物体）と合一するものでないことを論じる箇所であるが，その第８異論解答においてトマスは先ほどと同様のことを天使について特に言っている．

> もし或る形相が，何らのものにおいても受容されえないものであるとするなら，まさにこのことに基づいてその形相は個体化を保持する．なぜなら，その形相は複数のものにおいては存在することができず，かえってその形相だけが自分自身においてとどまっているからであ

る[23].

ここでトマスの語りが「もし〜であるとするなら」というようにして慎重になっていることに注意したい．というのも，『神学大全』でもトマスが明言しているところによれば，われわれ人間は，ここで言われているような自存形相をあるがままで知解することはできないからである．

> われわれは，それ自体で自存する単純な諸形相を，それらが存在することに即して知解することはできない[24].

それゆえトマスは，天使の種別化が事柄としては端的に理解することの難しいものであるということに自覚的である．それゆえ，天使の種別化を論証する際には，天体の事例をしばしば参照することが求められるが，この点については第5節で詳しく見ることになる．

最後に，種的本性に関して，ここまで得られたことを表にすると表1の通りである．種的本性に関して，通常の質料的事物が事物に即しても理拠に即しても共通性を持つのに対して，それが天使の場合には，事物に即しても理拠に即しても共通化不可能性を持つに至る．次節では，通常の質料的事物と天体の相異点についてより理解を深めることにしよう．そこで取り扱う天体の種別化論証こそ，天体の種的本性が事物に即して非共通的であることの理由づけとして理解することができる．それに対して，第5節

表1

| | 事物に即して | 理拠に即して |
|---|---|---|
| 通常の質料的事物 | 共通的 | 共通的 |
| 天体 | 非共通的 | 共通的 |
| 天使 | 共通化不可能 | 共通化不可能 |

で取り扱う天使の種別化論証は，天使の種的本性が事物に即しても理拠に即しても共通化不可能であることの理由づけであることになる．

## 四　諸天体の種別化論証：その種的本性の事物に即した非共通性

ここでわれわれは，事物に即して諸天体が種別化されていることに関するトマスの理由づけを見ることにしよう．トマスの天体論についてほとんど唯一の総合的な研究を行ったリットによれば，天体の種別化に関する議論を見ることのできる箇所は 15 箇所ある．具体的には次の通りである [25]．

1. 『対異教徒大全』第 2 巻第 93 章（1）[26]
2. 『対異教徒大全』第 2 巻第 93 章（2）
3. 『「ヘブライ人への手紙」註解』第 7 章第 4 講（n. 368）[27]
4. 『神学大全』第 1 部第 13 問題第 9 項主文
5. 『神学大全』第 1 部第 47 問題第 2 項主文
6. 『神学大全』第 1 部第 119 問題第 1 項主文
7. 『アリストテレス「形而上学」註解』第 7 巻第 15 講（n. 1627）
8. 『定期討論集　霊的被造物について』第 8 項主文
9. 『定期討論集　霊的被造物について』第 8 項第 12 異論解答
10. 『アリストテレス「命題論」註解』第 1 巻第 10 講（n. 122）
11. 『「原因論」註解』第 5 講（p. 39, ll. 26–28）[28]
12. 『知性の単一性について』第 5 章（n. 248）
13. 『分離実体について』第 12 章（n. 111）
14. 『アリストテレス「天について」註解』第 1 巻第 19 講（nn. 194–96）
15. 『アリストテレス「天について」註解』第 2 巻第 16 講（n. 449）

これらの中では，トマスが網羅的な論述を与えている箇所として，15が最も注目に値する．これは，アリストテレスの『天について』（*De caelo*）に対する註解[29]における議論であり，諸天体の種が一つであることを主張したイブン・ルシュド（アヴェロエス）[30]に対する批判を行っている．このことと，次節で扱う天使の種別化論証との類似性から，この箇所はトマスの見解が述べられている箇所として取り扱うこととする[31]．

第一にトマスは，もし諸天体が同じ種に属していたとするなら，それらは種的に同じ作用を行い，さらに種的に同じ結果を生み出すことになってしまうことを問題視する．

> まず第一には次の通りだからである．もしそれら［すなわち諸天体］が同じ種に属していたとするなら，それらは種において同じ諸作用と，同じ諸結果を持つであろう．それは，同じ種に属するあらゆる自然的事物において明らかな通りである[32]．

トマス自身は例を挙げていないが，例えば，地球上に熱をもたらし生物が生成変化することにも大きな影響を与えている太陽の役割は，他の天体には担うことができないといったことを想定することができる[33]．

第二にトマスは，諸天体の運動は各天体の本性に由来するがゆえに，諸天体の運動がすべて斉一（uniformis）になってしまうことを問題視する．ここで問題視されているのは，諸天体の運動がすべて種的に同一のものになってしまうという事態である．トマスは事実的な反証として，諸々の惑星同士（そこには月と太陽も含まれる）にも種的に運動の違いがあるし，また諸々の惑星と諸々の恒星の間にも種的に運動の違いがあることを示唆している．

> 第二には次の通りだからである．諸天体の諸運動は本性的なものであ

るのだから，あらゆる天体は斉一の運動を持っているということが帰結するであろう．それは偽であることは，諸々の惑星について，それら相互の対照によっても，諸々の恒星との対照によっても明らかである[34]．

第三および第四の理由は，これら二つの理由とは少し様子を異にする．第一および第二の理由はそれぞれ，諸天体が種的に異なる作用を行いその結果も種的に異なることや，諸天体の運動が種的に異なることという（トマスにとっての）事実的な前提を単に確認する側面が強かった．それに対して，後半の二つの理由においてトマスは，諸天体の種別化があるべき姿であることをより強調しようとする．そこで引き合いに出されるものこそ完全性（ないし善性）であり，これは，トマス的な種の理論を理解するという目的を持つわれわれにとっても重要な要素の一つである．第三の理由は天体の完全性を論拠とする．

第三には次の通りだからである．このこと［すなわち諸天体の種が一つであること］は諸天体の完全性に抵触する．その理由は以下の通りである．アリストテレスが［『天について』］第１巻で証明したことには，宇宙は，一つである――すなわち一つの種において一つである――がゆえに，完全なものである．実際，宇宙が自らの種の質料全体から成立しているということから，宇宙が一つであることが窺える．それゆえ，一つの種において一つの個体しかないということも，諸天体の完全性に属する．他方でわれわれは，諸々の下位の物体において多数の個体が一つの種に属しているのを見る．それは或る無能力（impotentia）のゆえであり，一つには，一つの個体が常に持続することができないからである．それゆえ，［諸々の下位の物体においては］同じ種における諸個体の継起によって種が保存されなければなら

ない．もう一つには，一つの個体では種の完全な作用にとって十分ではないからである．それはとりわけ人間たちにおいて明らかであり，その人間たちの内の或る一人は自らの作用において他の人によって助けられることがある[35]．

まずトマスは，アリストテレスの『天について』第１巻（278a22-279a11）を引き合いに出しながら，天について言われていたことを繰り返す．すなわち，一つの種に一つの個体しかないことの条件として，自らの種に対応する質料全体から構成されていることを挙げることができる．次にトマスは，天体よりも下位に位置する通常の質料的事物の場合，一つの種に多数の個体が存在することは何らかの無能力に由来すると言う．無能力の一つとしてここで考えられているのは，一個体が永続的に存在することができないという無能力である．それゆえ，下位のものどもにおいて種が保存されるためには，同じ種の下でさまざまな個体が継起的に存在し続けることが求められる．もう一つの無能力は，一個体が自分だけでは種に固有な作用を完全に行うことができないということである．これは特に人間たちにおいて明白なことであり，複数人の共同作業によって何らかの作用が達成されることが想定されている．このような共同作業の具体例としては，戦いに参加することや船を曳くことを挙げることができる[36]．この第三の理由全体からは，トマスが三つのことを天体の完全性の根拠として捉えていることがわかる．一つは，自らに固有な質料の全体から成立しているということである．もう一つは不可滅性である．これは，天体が被造物である限り，終わりにおいて可滅的でないということを意味する．そして最後の一つは，種に固有な作用を一個体で完全に行うことができるということである．やはり別のテクストでは，まさに太陽や他の諸天体が，自らの種的本性に応じた結果であれば何であれそれをたった一個体で産出できると言われている[37]．

最後に，第四の理由は世界の完全性[38]を論拠とする．

> さらには，諸々の種の多数化の方が，形相的なものであるがゆえに，諸個体の多数化――これは質料的なものである――よりもよく宇宙の完全性に属する[39]．

世界の完全性については次節において詳しく取りあげることになるが，ここでは，形相的な多数化と質料的な多数化という区別が注目に値する．この区別によってトマスは，諸天体の多数化は種的形相の種類そのものが多数化されることであるのに対して，通常の質料的事物における諸個体の多数化は同一の種的形相がただ数的にのみ多数化されることを強調する[40]．第三の理由において諸天体それぞれの完全性が示されたうえで，ここでは世界の完全性というより大きな視点から諸天体の種別化が捉え直されている．

われわれが見てきた諸天体の種別化論証における論拠を改めて整理すれば次の通りである．

①諸作用とその諸結果の種別化
②諸運動の種別化
③（諸天体の）完全性
A：種に固有な質料全体からの成立
B：不可滅性
C：作用の自足性
④世界の完全性

ちなみにリットは，天体が一つの種に一個体しかもたないことの理由を六つ挙げている[41]．具体的には次の通りである．

①形相がその形相を受け入れることができる質料全体を現実化している（テクスト2, 6, 10, 14, 15）[42].

②諸個体の多数性は種を保存するためには不要であるはずである．というのも，各個体が不可滅的だからである（テクスト1, 3, 8, 13, 15）.

③多数性は作用の完全性に到達するためには不要であるはずである.（テクスト2, 8, 13, 15）

④同じくらい卓越した存在者たちの間では，同じ種の諸個体の間に存在するような附帯的な秩序は不適合であるはずである．種的に異なる諸個体の間に存在するような自体的な秩序だけが適合的である（テクスト8）.

⑤各天体は自らの種的な諸作用および諸結果を持つ（テクスト9, 15）.

⑥各天体は自らの種的な運動を持つ（テクスト15）.

リットによって示されているこれら六つの論点を，われわれの整理と対応させると表2の通りである.

リットの整理における④はテクスト8の『霊的被造物について』第8項

表2

| | われわれの整理 | リットの整理 |
|---|---|---|
| 【A】作用とその結果の種別化 | ① | ⑤ |
| 【B】運動の種別化 | ② | ⑥ |
| 【C】種に固有な質料全体からの成立 | ③A | ① |
| 【D】不可滅性 | ③B | ② |
| 【E】作用の自足性 | ③C | ③ |
| 【F】世界の完全性 | ④ | ④ |

主文においてのみ登場するとされているが，次節で述べるように，この④は世界の完全性に関して言われていることである．それゆえ，リットにおける④とわれわれの整理における④とを同一のものとして分類すれば，『「天について」註解』第2巻第16講における諸天体の種別化論証（リットにおけるテクスト15）を最も網羅的なものだと正当に言うことができる．

最後に，【A】～【F】としてまとめた論拠がどういう性格のものであったかを思い出しておこう．前節での成果を踏まえるなら，これら六つの論拠はすべて，天体の種的本性が事物に即して非共通的であることの理由である．なぜなら，理拠の次元では，各天体の同一種における多数化の可能性は残されているからである．他方で，やはり前節での成果によれば，天使の種的本性は事物においても理拠においても共通化不可能である．それゆえ，もしこの比較において注目に値する差異が見出されるなら，それは諸天体と諸天使の間における種的本性の根本的な差異に関わるはずである．現時点でそれは，諸天体において種的本性が理拠に即しては共通的である一方，諸天使においては種的本性が理拠に即しても共通化不可能であるという違いに最もよく関わるはずだという予想を立てることができる．それに対して，両者の種的本性について同様の理由づけが見られるなら，それぞれの種的本性には連続性も存在していることになる．このようにしてわれわれは，今度は諸天体と諸天使の間における種的本性の性格がどのような共通点と相異点を持つのかを考察することに進んでいく．

## 五 諸天使の種別化論証：その種的本性の，事物と理拠に即した共通化不可能性

それではいよいよ，トマスによる天使の種別化論証を詳しく検討することにしよう．トマスの体系では，天使は非質料的事物であることが第一の基本的性格であるが，加えて知性的存在者でもあり意志的存在者でもあ

る[43]．それゆえ，天使は哲学的にさまざまな仕方で分析の対象とすることができるが[44]，ここでは主として天使の存在論について考慮することになる[45]．

天使の種別化に関してはトマスの主要著作すべてに対応箇所を見出すことができ[46]，最も体系的な論述を行っている箇所も存在する．それは『定期討論集　霊的被造物について』第８項の主文である．前節で見たリットによるリストでもテクスト８として参照されていたが，この箇所はまさに天使の種別化について有益な記述をわれわれに与えてくれる[47]．そこでは主要な論証として三つの論証が展開されている．第一の論証は諸天使の実体の条件（condicio）に基づいており，天使の非質料性に関する議論である．第二の論証は宇宙の秩序を，第三の論証は天使の本性の完全性を根拠に据えており，共に秩序や完全性を軸にして論証が進められる．これら三つの論証を諸天体の種別化論証と突き合せると，まず世界の完全性（【F】）という論点がここでの第二論証に対応するものであることは容易に窺える．次に，ここでの第三論証は，天体の完全性の論拠とされていたことごと（【D】と【E】）の中に共通点があることもある程度予想される．さらには，種に固有な質料全体からの成立（【C】）は，非質料的事物である天使の場合には除外される．他方で，残る第一論証が諸天体の種別化論証とどのような関係にあるのかどうかを見極めるためには，第一論証の内容を詳しく見る必要がある．さらには，諸作用とその諸結果の種別化（【A】）や諸運動の種別化（【B】）という論点が天使の場合にはどのように語られるのかも検討の対象である．このようにして簡単な見通しを立てたうえで，『霊的被造物について』における諸天使の種別化論証を見ることにしよう．

第一論証ははじめに，天使が非質料的で単純なものであるのか，それとも質料と形相から複合されたものであるのかという分岐を示す[48]．そのうえで，前者の場合には諸天使のそれぞれが種的に異なるものであるはずだ

ということを示していく．

> さて，もし天使が質料から切り離された単純形相であるなら，一つの種に属する複数の天使を思い描くことさえ不可能である．なぜなら，どれほど質料的で最下位のものであっても形相であれば何であれ，もしそれが存在に即してかあるいは知性に即してか［質料から］切り離されたものとして措定されるとするなら，一つの種においては一つの形相のみが残存するからである．例えば，あらゆる基体を欠いて自存する白さが知解されるとしたら，複数の白さを措定することは不可能であるだろう．というのも，このないしあの基体においてあるということによってのみこの白さはあの白さと異なるということをわれわれは見るからである．また同様に，もし人間性が［質料から］切り離されたものとしてあったとするなら，それはたった一つのものでしかないことになってしまうだろう[49]．

トマスによれば，質料との結びつきを必要としない形相は種という観点では一つのものでしかないということが論拠となって，複数の天使が一つの種に属することが否定される．例えば，白さという附帯形相や人間性という実体形相がもし何らのものによっても受容されずに切り離されたものとして（プラトンの言うイデアのように）そのまま存在するとしたら，それらはそれぞれの種において唯一の成員である．この例示によるトマスの意図は，白さの形相や人間性の形相が離在するものであることを示すことではなくて，天使の形相がそのようなものであるというイメージを示すことにある．

それに対して，天使が質料と形相から複合されたものである場合（この可能性をトマスは排除することになるが），複数の天使には質料における違いが認められることになる．この場合，質料形相論の基本的な枠組みと

して，形相は質料によって受容されなければ区別されないということが前提されている．ところで，トマスによれば，それぞれの質料が区別される仕方は二通りしかない．一つは，質料に固有な理拠である可能態に即して質料を区別することである．例えば，「どこ」（ubi）に対する可能態だけを持つそれ自体は不可滅的な天体の質料と，存在に対する可能態を持つそれより下位の可滅的な諸物体の質料が区別される．もう一つは，量の分割に即して質料を区別することである．すなわち，特定の諸次元（縦，横，高さという三つの次元のこと）の下にある質料がそれとは別の諸次元の下にある質料から区別される．トマスは特に例を挙げていないが，例えば或る机の上に置いてある二つの異なる箱を思い浮かべればよいだろう．以上を踏まえてトマスは，可能態に即した区別は類的な相異をもたらすのに対して，量の分割に即した区別は同じ種における数的な相異をもたらすと言う．しかし，量の分割に即した区別が天使においてなされる可能性は，天使の非物体性に基づいて直ちに否定される．それゆえ，類的な相異性のみが天使にもたらされる可能性が残ることになるが，トマスの意図としては，これはもはや天使というまとまりすらないことと等しいことになってしまう．かくして天使が質料と形相から複合されたものであるという可能性すべてが排除されるに至る．したがって，最初に分岐で示されたように天使は非質料的で単純なものであるという可能性のみが残り，諸天使は種的な仕方でのみ異なるものであることが確保される[50]．

このやや長い論証において理解されるのは，類，種，個という論理学的な概念が質料形相論および現実態と可能態の区別という形而上学的な枠組みの中で論じられていることである．種は明らかに本質主義的な観点で語られており，天体の質料もこの第一論証の中に登場する．前節で分析した天体の種別化論証においては，事物の本質的側面に関わることは天体の完全性という論点の下に集約されていた．それに対してトマスは，天使の種別化を示す第一論証において，事物の本質的側面をより大きな論拠として

前面に打ち出している．さらにこの論証によれば，天体は質料に固有な理拠である可能態を持つものとして分類される一方，そもそも非質料的な天使はそうした可能態をもたない．その結果として，この論証においては，前節で天体の種別化論証の論拠として抽出した【A】から【F】までの要素のいずれをも見出すことができない．したがって，この第一論証は諸天体と諸天使における種別化の相異を示す部分として理解することができる．

その相異はまさに質料性の有無によるわけだが，われわれにとってはこのことが，種的本性が共通性を持つかどうかの有無に関わるということが重要である．トマスはこの論証において，質料同士が区別される仕方としては，可能態に即して類的に区別されることと，量の分割に即して数的に区別されることの二通りしかないと言う．種的本性が共通化されうるということが関わるのは後者の数的な区別である．したがって，諸天体の種的本性が理拠に即しては共通的であることの根拠もおそらくこの点に関わると考えることができる．すなわち，それぞれの天体は，事物に即しては自らに固有な質料の全体から成立しているものの，天体が質料を持つ限り，論理的には量による分割の可能性があるという説明をトマス的な種の理論の一部だと見なすことができる．

ただし同時にトマスは，天使に関して直接的に事物の次元から語ることの困難さを感じてもいた．そのことは，この第一論証冒頭において，天使が非質料的なものであることと質料的なものであることが分岐として示されていることから特に窺える．天使の非質料性は，トマスにとって重要な主張であり[51]，主要著作でも必ず支持されており[52]，『霊的被造物について』でも第１項で詳細に論じられていた[53]．注目するべきは，特に同じ『霊的被造物について』において天使の非質料性は既に得られた成果の一つであるにもかかわらず，第８項主文での論証はそのことをあまり自明視せずに議論を行っていることである．実際，この第一論証は，天使が質料

的なものである場合に生じる困難を提示して，帰謬法により，天使が非質料的である場合に帰結する諸天使の種別化を支持するという方法を採用している．帰謬法において前提となっていたことはあくまで，天使の非物体性と，諸天使の相異が類的にのみ言われることへの不同意であった[54]．このことからは，天使に関して事物に即して論じることへの慎重さを読み取ることができる．もし諸天体の種別化論証とは一線を画す仕方で諸天使の種別化論証を行うことを目指すなら，本来であればこの第一論証だけでも十分なはずである．なぜなら，後述するように第二論証や第三論証は諸天体の種別化論証と連続性を持つものであるため，天体論と非連続な仕方で議論を行っているのは第一論証だけだからである．それゆえ，第二論証と第三論証の存在意義は，天使についてただ端的に論じるのではない仕方で種別化の証明をすることにある．だからこそわれわれは，この第二論証と第三論証において，諸天体の種別化論証との共通点を多く見出すことになる．

第二の論証は，まず宇宙の善には二通りあることを示す．すなわち，厳密に言えばこの世界の外に分離された形で存在する善である神と，神以外の諸事物そのものの内にある善の二つである．後者の善が，宇宙の諸部分の秩序と言い換えられる．続けて論じられるのは，世界の完全性という観点に基づく諸天使の種別化である．トマス曰く，宇宙のより上位の部分はそれだけ宇宙の善をより多く分有していなければならない．これは世界の完全性として語られることの重要な前提であり，宇宙ないし世界がヒエラルキーによって理解されていることがわかる．ところで，宇宙の諸部分の秩序（すなわち諸事物の善）がより完全に分有されるのは，秩序が自体的に分有される場合のことであり，秩序が附帯的にのみ分有される場合のことではない（これは，前節で見たように，リットが挙げていた理由の④である）[55]．このことに対するトマスの説明は次の通りである．

> さて明白なことには，一つの種に属するあらゆる個体においては，秩序は附帯的にしか存在しない．というのも，そうした個体は，種の本性においては適合し，個体化する諸原理および相異する附帯性に即しては異なるのであって，その諸原理および附帯性は種の本性と附帯的に関わるものだからである．他方で，種において異なるものどもは，本質的な諸原理に即して自体的に秩序を持つ．というのも，諸事物の諸々の種においては，一方の種が他方の種に対して余剰があるということが見出されるからである[56]．

この箇所でトマスは，世界の秩序を主要な仕方で担っているものは種であることを明言している．たとえ同一の種の下に多数の個体が存在していたとしても，秩序としては一つの種しか存在していない．世界の秩序を自体的に支えているのは本質的に異なっているものどもであり，つまりは種である．続けて彼は，世界の秩序を具体的に描写する．まず生成消滅するものの場合，一つの種に属する各々の個体は，一つの種的本性を分有するだけであるので，秩序を附帯的にしか分有していない．それに対して，一つの種に一つの個体しか属さない太陽や月などの天体の場合，各々の個体はそれぞれが持つ種的本性に即して自立しており，それぞれが自体的にのみ秩序を持つ．したがって，ましてなおさら，天体よりも上位にある天使は，宇宙の最上位の部分に存在するがゆえに，宇宙の中にあるものの中では最も自体的な仕方で秩序が見出されるはずである．それゆえ，諸天体ですら種的にのみ異なるような仕方で宇宙における秩序を持っているのだから，神に最も近い存在者である天使もやはり種という点で相互に異なるものであるという可能性が最後に残される[57]．こうした一連の議論において根本にある世界の完全性という論点（【F】）が諸天体の種別化論証との共通点の一つでもあるが，それに加えて，世界の秩序全体の中で天使が天体の延長線上に位置づけられていることも特徴的である．トマスは明らかに

ここで天体の領域と天使の領域を連続的に捉えている．

第三の論証は，世界に存在するさまざまな事物それ自身が持つ完全性の諸段階に注目する．最初の出発点としては，完全性の最上位にある神と最下位にある生成消滅するものという両極端が設定される．神には存在全体にわたって欠けているところが何もない．それに対して，生成消滅するものの個体には，自らの個体化の理拠に関する限り不足はないが，自らの種的本性に即しては不足がある．その理由としてトマスが想定しているのは，生成消滅するものの個体は種的本性を一個体だけで担うことができないということであろう．つまりは，個体の可滅性が種的本性に関して不足が見られる原因である[58]．続けてトマスは，神と生成消滅するものという両極端から出発して，天体や天使に向かっていく．

> 他方で，宇宙のより上位の部分においては完全性のより高い段階が見出され，そこにあるものどもにおいては，太陽のような一つの個体が，固有の種に属するものどもの内の何もそれに欠けていないというようにして完全であり，それゆえ，種の質料全体も一つの個体の下に包括される．そして他の諸天体についても同様である．したがって，ましてなおさら，被造的諸事物の最上位の部分――それは神に最も近接的である――においては，すなわち諸天使においては，種全体に属するものどもの内の何も一つの個体に欠けていないというような完全性が見出されるのであるからして，一つの種において複数の個体があるということにはならないはずである[59]．

この論証はトマスも言うように天使の本性の完全性に基づいており，個体の不可滅性（【D】）を諸天体の種別化論証との共通点として指摘することができる．すなわち，天体も天使も一個体だけで固有な種的本性を保持できることが認められており，その重要な根拠は，生成消滅する事物のよ

うにさまざまな個体が継起的に一つの種的本性を保持し続ける必要がないということである．

諸天使の種別化論証という枠内でまだわれわれが言及していないのは，作用の自足性（【E】），諸作用およびその諸結果の種別化（【A】），諸運動の種別化（【B】）の三つである．これらについて具体的に考えるためには，まず『霊的被造物について』第８項の主文ではなくて異論および異論解答の部分を見るのが有用である．その第６異論は，ダマスコスのヨアンネス（ダマスケヌス）による天使の定義を取りあげたうえで，それがすべての天使において共通する限りでは諸天使の種における同一性を示すものでもあることを主張する[60]．その定義は次の通りである．

> 天使とは，知性的で，常に可動的で，裁量において自由で，非物体的で，神に奉仕し，本性によってではなくて恩寵に即して不死性を受け入れる実体である[61]．

これに対するトマスの解答は，われわれ人間が天使について知ることには限界があることを説明することから始める．天使の本質は人間知性の通常の認識対象である可感的なものどもという類を超えたものであるがゆえに，人間知性は天使をその本質に即して知解することができない[62]．そのうえで，トマスは次のように述べる．

> 諸々の分離実体は，われわれの側からは固有な仕方で定義されえないのであって，むしろ排除（remotio）によって，あるいはそれら実体に属する或る作用によって定義されうるのみである．そしてダマスケヌスが天使を定義するのはこうした仕方によってなのである[63]．

この箇所は『霊的被造物について』第８項全体で唯一「作用」（operatio）

という語が使われる箇所でもある．ここでトマスは，われわれ人間知性が天使の本質をあるがままには認識できないという大原則を確認したうえで，それでも天使について知るには，排除によって，つまりは天使が何でないかを示すことによってか，あるいは天使が持つ何らかの作用を手がかりにするしかないと言う．ダマスケヌスによる定義においては，①知性的，②常に可動的，③裁量において自由，④非物体的，⑤神に奉仕する，⑥本性によってではなくて恩寵に即して不死性を受け入れるという六つの項目が含まれていた．④や⑥はここでは排除の対象と考えてよいだろう．それゆえ，残る四つの項目を作用の具体例として考えることができる．したがって，作用の自足性や，諸作用およびその諸結果の種別化が，諸天使の種別化論証においても考慮されていると見なす可能性はここにある．作用の自足性をより直接的に示唆する箇所としては，『分離実体について』第12章を参照することもできる．この箇所は，あらゆる霊的実体が等しいものとして創造されたと考えるオリゲネスの見解を論駁する箇所であり，トマスは五通りの議論によって反論している[64]．それゆえこの箇所は，諸天使が単に数的にのみ区別されているものではないことを主張する限りで，諸天使の種別化論証としても理解することができる．その二番目の議論（これはリットにおけるテクスト13に対応する）が霊的実体の完全性に依拠するものである．この議論は二つの部分に細分化されていて，一方は不可滅性に関わり，他方がまさに作用の自足性に関わる[65]．後者の対応箇所は次の通りである．

> 自らの力が完全であり，自らの本性の秩序において存続しているものどもは，同じ種の同等性において数に即して多数化されるのではない．実際，太陽はただ一つ存在していて，常に存続すること，および自らの本性の段階に即して自身に適合するあらゆる結果を産出することのためにはそれで十分である．そして同じことは他の諸天体におい

ても窺える．だが，諸々の霊的実体は諸天体よりもさらにはるかに完全なものである．したがって，その諸実体においては，本性の同じ段階において多数の実体が見出されるのではない．というのも，一つの実体で十分であるのだから，他の諸実体は余計になってしまうからである[66]．

最後に，諸運動の種別化については，やはりダマスケヌスによる定義にあった「常に可動的」という点を考慮することができる．トマスは，物体の運動とは異なる仕方ではあるものの，天使が場所的な運動を行うこと自体を他の著作でも認めている[67]．それゆえ，諸運動の種別化も，諸天使の種別化論証の枠内に位置づけることが可能である．

## 六　結

トマス的な種の理論を統一的に理解する試みとして，本稿の主要な成果は次の二点に集約できる．

一つは，諸天体と諸天使のそれぞれが種別化されていることの共通する論拠として，次の五つを抽出したことである．

- 世界の完全性
- 不可滅性
- 作用の自足性
- 諸作用とその諸結果の種別化
- 諸運動の種別化

これらの観点は，諸天体および諸天使の種別化論証において共通に窺えるものである限りにおいて，天体論と天使論の連続性を示すものでもある．『霊的被造物について』第 8 項第 6 異論解答において言われていたように，

天使について端的に知ることの不可能性についてトマスは非常に自覚的であった．それゆえ，天使論におけるトマスの探求態度が，天使の種について学問的に捉える場合にも天体の種について把握するのと同様の手法を採用するという具体的な過程として現実化したと見なすことができよう．

もう一つは，諸天体が理拠に即しては共通的であるのに対して，諸天使が理拠に即しても共通化不可能であるという違いの原因に見通しをつけたことである．簡潔に言うなら，それは質料性の有無である．すなわち，質料性がある場合には量による分割の可能性を論理的に含意するのに対して，質料性がなければそもそも量による分割は不可能であり，一つの種的本性が複数の個体に共有されるという可能性がそもそも存在しない．この点は天体論と天使論の非連続性を示すものである．他方で，諸天体が理拠に即しては共通的であることは，通常の質料的事物との共通点でもある．すなわち，天体と天使の比較を通じて，天体と通常の質料的事物との共通性についても理解を深めることができた．

しかしながら，実は本稿がトマス的な種の理論という枠内で主題化しなかったがやはり重要な論点が一つある．それは，通常の質料的事物における種的本性が事物に即して共通的であるということが，トマスにとってはどのように理由づけされているのかということである．われわれが見てきた諸天体および諸天使の種別化論証を踏まえるなら，差し当たりは次のものを列挙することは可能である．

- 世界の完全性
- 可滅性
- 種に固有な質料全体の部分からの成立
- 作用の自足不可能性
- 諸作用とその諸結果の種的同一性
- 諸運動の種的同一性

これらは，諸天体や諸天使と比べると，基本的に否定的ないし消極的な仕方で言われていることである．これは世界の完全性という論点において顕著である．前節で見たように，通常の質料的事物は世界全体の秩序から見たら劣ったものであるがゆえに，同一の種に属する複数の個体が附帯的に秩序を分有していると説明される．通常の質料的事物において種的本性が事物に即して共通的であることは，もう少し肯定的ないし積極的な仕方で捉えることはできないのかどうか．この問題について考えることを今後の課題としたい[68]．

## 注

[1] 石田 2017d; Bonino 2007: 127–29; Suarez-Nani 2002: 39–50; Vernier 1986: 105–10.

[2] 「種別化」という語は一貫して，或るものが存在論的に（あるいは実在において）実際に種的に区別されていることを指す．

[3] Grant 1994: 430.

[4] Litt 1963: 91–98.

[5] 石田 2017d: 36; Suarez-Nani 2002: 41–42; Vernier 1986: 105.

[6] ...illud per quod res constituitur in proprio genere uel specie est hoc quod significatur per diffinitionem indicantem quid est res.... Cf. 稲垣 2012: 9. 原文からの引用は，*Corpus Thomisticum* で最良の校訂版として挙げられているものに基づく（http://www.corpusthomisticum.org/reoptedi.html）．また，既存の日本語訳が存在する場合にはここにおけるように対応箇所を併記するが，引用文自体はすべて拙訳である．なお，引用文における（　）や［　］は引用者による補足である．

[7] Cf. 『有と本質について』第 2 章～第 3 章．この箇所では類，種，種差という論理学的概念についてより詳細な議論が展開されているが，この議論を取り込むことは本稿では割愛せざるをえなかった．今後の課題としたい．

[8] ...essentie rerum compositarum ex eo quod recipiuntur in materia designata multiplicantur secundum diuisionem eius, unde contingit quod aliqua sunt idem specie et diuersa numero. Cf. 稲垣 2012: 53, 55.

[9] 《materia designata》と《materia signata》はともに「個的な質料」を意味していると理解し，いずれも「指定質料」と訳出した．

[10] ...inuenitur essentia in substantiis compositis ex materia et forma, in

quibus...natura uel quiditas earum est recepta in materia signata. Et ideo...in eis iam propter diuisionem signate materie possibilis est multiplicatio indiuiduorum in una specie. Cf. 稲垣 2012: 73, 75.

[11] ただし人間についてはもう少し事情が複雑である．詳しくは石田 2015b を見よ．

[12] ...cum essentia simplicis non sit recepta in materia, non potest ibi esse talis multiplicatio; et ideo oportet ut non inueniantur in illis substantiis plura indiuidua eiusdem speciei, sed quot sunt ibi indiuidua tot sunt ibi species, ut Auicenna expresse dicit. Cf. 稲垣 2012: 55.

[13] Et ideo in talibus substantiis non inuenitur multitudo indiuiduorum in una specie.... Cf. 稲垣 2012: 69.

[14] 「種の個体説」という名称そのものは，生物学の哲学におけるマイケル・ギセリンらの議論から借用しているが，あくまで形式的な名称の適用であることを断っておく．ギセリンらの議論については次を見よ：三中 2017：256–58；田中 2015：66–71；植原 2013: 73–114; 生野 2010.

[15] Cf. 『有と本質について』第5章;『「命題集」註解』第1巻第8区分第4問題第2項；第19区分第4問題第2項;『対異教徒大全』第1巻第24章および第25章;『神学提要』第1部第12章～第14章;『定期討論集　神の能力について』第7問題第3項;『神学大全』第1部第3問題第5項.

[16] ...natura humana communis est multis secundum rem et rationem, natura autem solis non est communis multis secundum rem, sed secundum rationem tantum; potest enim natura solis intelligi ut in pluribus suppositis existens. Cf. 高田 1960: 299.

[17] ...intellectus intelligit naturam cuiuslibet speciei per abstractionem a singulari: unde esse in uno supposito singulari vel in pluribus, est praeter intellectum naturae speciei: unde, servato intellectu naturae speciei, potest intelligi ut in pluribus existens. Cf. 高田 1960: 299–300.

[18] ...singulare, ex hoc ipso quod est singulare, est divisum ab omnibus aliis. Unde omne nomen impositum ad significandum aliquod singulare, est incommunicabile et re et ratione: non enim potest nec in apprehensione cadere pluralitas huius individui. Cf. 高田 1960: 300.

[19] Si...esset aliquod nomen impositum ad significandum Deum non ex parte naturae, sed ex parte suppositi, secundum quod consideratur ut *hoc aliquid*, illud nomen esset omnibus modis incommunicabile.... Et est simile si quis imponeret nomen Soli designans hoc individuum. Cf. 高田 1960: 301–2.

[20] 石田 2017d: 33–35.

[21] Formae vero quae non individuantur per aliquod suppositum, sed per seipsas (quia scilicet sunt formae subsistentes), si intelligerentur secundum quod sunt in seipsis, non possent communicari nec re neque ratione.... Cf. 高田 1960: 300.

[22] なお筆者は，全 11 項からなる『霊的被造物について』の日本語による全訳を既に公刊している．具体的には次の通り（それぞれ第 1 項から順番に 1 項ずつの試訳である）：石田 2014a; b; 2015a; 2016a; b; c; 2017a; b; c; 2018a; b.

[23] ...si aliqua forma sit que non sit in aliquo receptibilis, ex hoc ipso indiuiduationem habet, quia non potest in pluribus esse set ipsa sola manet in se ipsa. Cf. 石田 2016b: 126.

[24] ...formas simplices per se subsistentes non possumus intelligere secundum quod sunt.... Cf. 高田 1960: 300.

[25] Litt 1963: 91–98.

[26] (1) と (2) は引用者が付したものである．リットが同じ箇所から二つの異なる議論を区別しているからである．

[27] この段落番号はマリエッティ版のものである．以下も同様．

[28] このページ数および行数はサフレ版のものである．

[29] この註解はまだ日本語訳による翻訳が公刊されていない．現代語訳としては英訳 (Larcher et Conway 1964) と西訳 (Cruz Cruz 2002) が挙げられる．

[30] Giovanni 2006.

[31] すなわち，註解書においてもトマスがしばしば自分の見解を述べていることの事例としても，この議論を理解することができる．

[32] Primo quidem quia, si essent eiusdem speciei, haberent easdem specie operationes, et eosdem effectus, sicut patet in omnibus rebus naturalibus eiusdem speciei.

[33] Cf.『神学大全』第 1 部第 4 問題第 2 項主文．

[34] Secundo quia, cum motus caelestium corporum sint naturales, sequeretur quod omnia corpora caelestia haberent uniformes motus: quod patet esse falsum tum de planetis per comparationem ad invicem, tum per comparationem ad stellas fixas.

[35] Tertio quia hoc repugnat perfectioni caelestium corporum. Probavit enim in primo Aristoteles quod universum est perfectum, eo quod est unum (unum enim est in una specie)：ex hoc enim apparet quod constat ex tota materia suae speciei. Unde et hoc ad perfectionem caelestium corporum pertinet, quod sit unum solum in una specie. Videmus enim in inferioribus corporibus

multa individua esse unius speciei, propter aliquam impotentiam, vel quia unum individuum non potest semper durare; unde oportet quod species conservetur per successionem individuorum in eadem specie. Tum etiam quia unum individuum non sufficit ad perfectam operationem speciei; sicut maxime patet in hominibus, quorum unus iuvatur ab alio in sua operatione.

[36] 『分離実体について』第12章.

[37] 『分離実体について』第12章. このテクストは, 註の付いている引用文として, 後で再出する.

[38] これについて全般的には, Blanchette1992を見よ.

[39] Pertinet etiam magis ad perfectionem universi, multiplicatio specierum, cum sit formalis, quam multiplicatio individuorum, quae est materialis.

[40] トマスは, こうした区別を質料的な分割と形相的な分割と表現することがある. これについては次を見よ: 石田 2018c: 8–9.

[41] Litt 1963: 96–97.

[42] このテクスト番号は, 本節の冒頭で掲げた箇所の番号と対応している. また, リットによる六つの理由の番号づけは引用者によるものである.

[43] Cf.『神学大全』第1部第50問題〜第60問題.

[44] Adler 1982: 97–141(日本語訳: 155–218).

[45] 中世のスコラ学者たちにとっては, 天使の種について語ることがいつも単に存在論の問題であるのみなわけではないことに注意したい. 例えば, ペトルス・ヨハニス・オリヴィは, 天使の種について論じる際に, 存在論的な観点と認識論的な観点を区別することについて明白に自覚的である(『「命題集」第2巻問題集』第33問題).

[46] 『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項;『対異教徒大全』第2巻第93章;『神学大全』第1部第50問題第4項.

[47] この箇所については既に個体化の原理という観点から分析したことがあるが(石田 2017d: 36–37), 本稿では種という観点からより詳細に分析することを意図している.

[48] Cf. 石田 2017b: 85.

[49] Si autem angelus est forma simplex abstracta a materia, impossibile est etiam fingere plures angelos unius speciei, quia quecumque forma quantumcumque materialis et infima, si ponatur abstracta uel secundum esse uel secundum intellectum, non remanet nisi una in specie una. Intelligatur enim albedo absque omni subiecto subsistens, et non erit possibile ponere plures albedines, cum uideamus quod hec albedo non differt ab illa nisi per hoc quod est in hoc uel in illo subiecto; et similiter si esset humanitas abstracta, non esset nisi una tantum. Cf. 石田 2017b: 85–86.

[50] Cf. 石田 2017b: 86.

[51] 石田 2016d; Bonino 2007: 120–25; Vernier1986: 83–88; Collins 1947: 42–74.

[52] 『「命題集」註解』第 2 巻第 3 区分第 1 問題第 1 項;『対異教徒大全』第 2 巻第 50 章～第 51 章;『神学大全』第 1 部第 50 問題第 2 項.

[53] Cf. 石田 2014a: 45–48.

[54] 天使の非質料性と非物体性を直ちに同一視しないことについては, 石田 2016d を見よ.

[55] Cf. 石田 2017b: 86.

[56] Manifestum est autem quod in omnibus indiuiduis unius speciei non est ordo nisi secundum accidens: conueniunt enim in natura speciei et differunt secundum principia indiuiduantia et diuersa accidentia, que per accidens se habent ad naturam speciei. Que autem specie differunt ordinem habent per se secundum essnetialia principia: inuenitur enim in speciebus rerum una habundare super aliam.... Cf. 石田 2017b: 86. なお, この秩序に関する二つの区別について詳しくは次を見よ: Blanchette 1992: 140–46.

[57] Cf. 石田 2017b: 86–87.

[58] Cf. 石田 2017b: 87.

[59] In parte autem superiori uniuersi inuenitur altior gradus perfectionis, in quibus unum indiuiduum, ut sol, sic est perfectum ut nichil ei desit eorum que ad propriam speciem pertinent: unde et tota materia speciei concluditur sub uno indiuiduo. Et similiter est de aliis corporibus celestibus; multo igitur magis in supprema parte rerum creatarum, que est Deo propinquissima, scilicet in angelis, hec perfectio inuenitur ut uni indiuiduo nichil desit eorum que ad totam speciem pertinent, et sic non sint plura indiuidua in una specie. Cf. 石田 2017b: 87.

[60] Cf. 石田 2017b: 83.

[61] ...Angelus est substantia intellectualis, semper mobilis, arbitrio libera, incorporea, Deo ministrans, secundum gratiam, non natura, immortalitatem suscipiens.... Cf. 石田 2017b: 83. なお出典は『知識の泉』(*Fons scientiae*)第 3 部第 17 章であり, ラテン中世において流布していたピサのブルグンディオによるラテン語訳『正統信仰について』(*De fide orthodoxa*)の第 17 章に相当する.

[62] Cf. 石田 2017b: 89.

[63] ...substantie separate non possunt diffiniri a nobis proprie, set solum per remotionem uel aliquam operationem ipsarum. Et hoc modo Damascenus diffinit angelum.... Cf. 石田 2017b: 89.

[64] Cf. 八木・矢玉 1993: 653–57.

[65] Cf. 八木・矢玉 1993: 655–56.

[66] Illa...quorum est virtus perfecta et permanentia in ordine suae naturae, non multiplicantur secundum numerum in aequalitate eiusdem speciei: est enim unus sol tantum qui sufficit ad semper permanendum et ad omnes effectus producendos qui sibi conveniunt secundum gradum suae naturae; et idem apparet in ceteris caelestibus corporibus. Substantiae autem spirituales sunt multo perfectiores corporibus etiam caelestibus; non igitur in eis inveniuntur multae in eodem gradu naturae, una enim sufficiente aliae superfluerent. Cf. 八木・矢玉 1993: 655–56.

[67] Cf.『神学大全』第1部第53問題.

[68] 本稿は，JSPS科研費17J00136および18K12191の助成を受けたものである.

## 文献表

Adler, M. J. 1982. *The Angels and Us*. New York: Collier Books. 日本語訳：アドラー，モーティマー・J. 1997.『天使とわれら』．稲垣良典．訳．講談社.

Blanchette, O. 1992. *The Perfection of the Universe according to Aquinas: A Teleological Cosmology*. University Park (Pennsylvania): The Pennsylvania State University Press.

Bonino, S.-Th. 2007. *Les anges et les démons: Quatorze leçons de théologie catholique*. Paris: Éditions Parole et Silence.

Cruz Cruz, J. 2002. *Comentario al libro de Aristóteles sobre El cielo y el mundo*. Pamplona: Ediciones Universidad de Navarra.

Giovanni, M. di. 2006. "Averroes on the Species of Celestial Bodies." Pp. 438–64 in *Wissen über Grenzen: Arabisches Wissen und lateinisches Mittelalter*, ed. Speer, A., et Wegner, L., Berlin, New York: Walter de Gruyter.

Grant, E. 1994. *Planets, Stars, and Orbs: The Medieval Cosmos, 1200–1687*. Cambridge: Cambridge University Press.

Larcher, F.R. et Conway, P.H. tr. 1964. *Exposition of Aristotle's Treatise On the Heavens*. 2 vols. Columbus, Ohio: College of St. Mary of the Springs.

Litt, Th. 1963. *Les corps célestes dans l'univers de saint Thomas d'Aquin*. Publications universitaires, Béatrice-Nauwelaerts.

Suarez-Nani, T. 2002. *Les anges et la philosophie: Subjectivité et fonction cosmologique des substances séparées à la fin du XIIIe siècle*. Paris: Librairie philosophique J.Vrin.

Vernier, J.-M. 1986. *Les anges chez saint Thomas d'Aquin: Fondements historiques*

*et principes philosophiques*. Paris: Nouvelles Editions Latines.
生野剛志．2010.「種の個体説について：Michael T. Ghiselin. “Species Concepts, Individuality, and Objectivity”を中心として」.『哲学研究論集』. 6: 116–24.
石田隆太．2018c.「超越概念と個：トマス・アクィナスの場合」.『哲学』（三田哲学会）. 141: 1–28.
————．2018b.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第十一項　試訳」.『宗教学・比較思想学論集』. 19: 57–77.
————．2018a.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第十項　試訳」.『古典古代学』. 10: 1–54.
————．2017d.「トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって」.『中世思想研究』. 59: 31–45.
————．2017c.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第九項　試訳」.『筑波哲学』. 25: 83–126.
————．2017b.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第八項　試訳」.『宗教学・比較思想学論集』. 18: 77–111.
————．2017a.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第七項　試訳」.『古典古代学』. 9: 47–63.
————．2016d.「質料概念と天使の非質料性——トマス・アクィナスによる天使論の一側面」.『中世哲学研究』. 35: 22–40.
————．2016c.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第六項　試訳」.『筑波哲学』. 24: 39–63.
————．2016b.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第五項　試訳」.『宗教学・比較思想学論集』. 17: 105–27.
————．2016a.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第四項　試訳」.『古典古代学』. 8: 31–56.
————．2015b.「トマス・アクィナスにおける人間の魂の個体化——魂と身体の関係をめぐって」.『中世思想研究』. 57: 55–68.
————．2015a.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第三項　試訳」.『宗教学・比較思想学論集』. 16: 57–91.
————．2014b.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第二項　試訳」.『筑波哲学』. 22: 129–53.
————．2014a.「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第一項　試訳」.『宗教学・比較思想学論集』. 15: 33–57.
稲垣良典．訳註．2012．トマス・アクィナス．『在るものと本質について』．知泉書館.
植原亮．2013.『実在論と知識の自然化　自然種の一般理論とその応用』．勁草書

房.
高田三郎．訳．1960．トマス・アクィナス．『神学大全』．第1冊．創文社.
田中泉吏．2015.「生物学的個体化――有機体と種のケース」.『哲学』（三田哲学会）．134: 55–77.
三中信宏．2017.『思考の体系学　分類と系統から見たダイアグラム論』．勁草書房.
八木雄二，矢玉俊彦．訳．1993．トマス・アクィナス．「離存的実体について（天使論）」．上智大学中世思想研究所．編訳・監修．『中世思想原典集成14　トマス・アクィナス』．平凡社，585–717.